

新潟県奨学金ネットワーク通信

第5号目次

奨学生成果報告会の開催にあたって

新潟県奨学金ネットワーク代表 江花史郎 2

高校奨学生の成果報告会を開催しました！

奨学生11名が自分の夢について堂々と発表 3

ゆきぐに信用組合小野澤理事長インタビュー

職員の仕事は預金集めではなく募金集め！ 6

book紹介「教育費破産」 安田賢治 祥伝社新書 11

奨学金情報 TOPICS 12

編集後記 12

【コラム】奨学金問題の現状と課題

3月3日に開催した奨学生成果報告会で「奨学金問題の現状と課題」と題して、10分ほど説明する時間を頂きました。短い時間の割に内容を詰め込みすぎて、わかりにくかったかもしれませんので、内容をかいつまんで紹介します。

①40年間で国立大学の入学金・授業料は53万円増えているのに、初任給は10万円しか増えていない。②一方で勤労者世帯収入は直近でこそ増加しているものの、非正規労働者の増加により18年間で110万円以上減少している。③よって奨学金利用者は24年間で年100万人も増加している。④日本学生支援機構の貸与型返還者は2022年度末で483万人もあり、うち13万人が3か月以上の延滞者。⑤給付型奨学金の利用資格は厳しい。⑥奨学金問題はこれから利用する人と、今返還で困っている人の両方を考えなければならない。⑦貸与型奨学金を利用する人は機関保証を選択すること。⑧返済に困った時は減額返還制度、返還期限猶予制度を利用すること。⑨平均返還年数は第一種（無利子）で14年、第二種（有利子）は17年。延滞者のうち50歳代が15%いる。⑩日本では親が教育費を負担するのが当たり前だが、世界では少数派。⑪中央労福協7つの提言。⑫私たちにできることは、制度改善、民間給付型奨学金、寄付金、学びたい子どものための社会を作ること。課題山積ですね。（中川）



奨学生成果報告会の開催にあたって

新潟県奨学金ネットワーク代表 江花史郎

現在、大学生の約半数が奨学金を利用しています。奨学金の利用者が増えている背景には、学費の高騰、家計収入の低下等があると考えられ、奨学金を借りなければ進学できない若者が多数存在します。また、経済的な理由で進学を諦める若者も少なくありません。

このような問題は、①給付型奨学金の不足、②高額な学費・教育費、③低賃金・不安定な雇用状況等によって構造的に生み出されています。誰もが等しく教育を受けられる社会を実現するために、社会全体が取り組むべき問題です。

日本弁護士連合会の機関雑誌である「自由と正義」の 2024 年 2 月号の冒頭に廣瀬英雄弁護士（岐阜県弁護士会）による「奨学金基金の設立について」という寄稿がありましたので、紹介します。廣瀬弁護士は、経済的に困窮している家庭に育ち、定時制高校を卒業して労働基準監督署に勤め、夜間の短期大学に通学して国家公務員上級試験に合格し、労働省に勤務しました。さらに、夜間の大学に通学して司法試験に合格し、1970 年に弁護士登録してから現在も弁護士として活動されているということです。廣瀬弁護士は、「一番大きかったのは、高校時代に受けた奨学金給付だったと思う」と振り返った上で、「貧しいがゆえに、勉学の意欲があっても勉強できず、現状のままに身を置かざるを得ない。貧しさから抜け出せない若者を一人でも救えないだろうかと思うようになり、奨学金の給付を思い立っ

た」として、2019 年に私財から 1 億円を出資して奨学金基金を設立し、毎年 5 名に月額 5 万円を 4 年間支給（無償還）しているということです。

廣瀬弁護士のように自ら基金を設立して多額の出資をすることは簡単でないですが、意欲がありながら経済的な理由で進学を断念する若者をなくさなくてはならないという廣瀬弁護士の気持ちには誰もが共感するところでしょう。そのための施策の一つが、給付型奨学金制度です。日本の多くの奨学金は貸与型ですが、給付型の場合は償還が不要のため、返済に追われることなく卒業後に生活できます。

新潟県内でも、給付型奨学金制度の創設、企業による奨学金の返済支援制度等、若者の学業と就労を支援する取り組みも広がっています。

本日の成果報告会では、実際に給付型奨学金を受給して勉学に励んでいる皆様から、給付型奨学金制度の意義などについて発表していただきます。意欲のある若者を応援したいという気持ちが更に強くなると思います。

また、成果報告会後には、奨学金の返済等で困っている方などを対象とした弁護士による無料相談会を実施しますので、お気軽にご利用ください。



高校奨学生の成果報告会を開催しました！

奨学生11人が自分の夢について堂々と発表

2024年3月3日（日）新潟市中央区の新潟ユニゾンプラザで、高校奨学生による成果報告会が開催されました。本集会は新潟県奨学金ネットワーク（代表：江花史郎）と未来応援奨学金にいがた（理事長：土田雅穂）の2つの団体が、実行委員会を結成して開催したものです。当日は、定員100人を上回る111人の参加者があり、ほぼ満席となりました。

ネットワークの事務局としても、この集會に備えて、昨年から準備を重ね、「ほんとに発表してくれる奨学生が見つかるかな？」「この集會に多くの人が集まってくれるかな？」「来賓の県知事はきちんと奨学生の発表を聞いてくれるかしら？」など、多くの不安がありましたが、無事、終了できてほっとしています。



江花実行委員長



来賓の花角知事

当日参加者も20人ほどあり、特に新潟ろうきん役職員から多くご参加いただきました。御礼申し上げます。

新潟県奨学金ネットワーク石本事務局長（新潟県労協専務理事）の司会で開会し、実行委員長の江花弁護士の挨拶、来賓の花

角新潟県知事のご挨拶の後に、中川副代表が10分ほど「奨学金問題の現状と課題」について、スライドを使って説明しました。教育費の値上がり、勤労者世帯の収入低下、その結果としての奨学金利用者の増加など社会的構造の問題や返還時の対応などについて説明を行いました。



会場はほぼ満席となりました

いよいよ、奨学生の成果報告会の開始です。今回は、新潟ろうきん福祉財団の奨学生が5名、未来応援奨学金にいがたの奨学生が6名の合計11名から、発表してもらいました。事前に800字程度の作文を書いてもらい、それを読み上げる形での発表でした。県知事からも奨学生全員の発表を聞いてもらいました。きっと感じるものがあったと思います。

【奨学生の発表内容】

- ・エンジニアをめざしている。奨学金はTOEICの参考書購入に充てた。今後の海外研修費用にも充当したい。
- ・西欧史の研究職をめざしている。塾に行かず独学で受験を乗り切りきれた。
- ・4つのクラブ活動に参加できた。奨学金で参考書を購入し、国立大学医学部に推薦

合格できた。

・ものづくりの知識と技術を学んで、3DCAD や 3D プリンターで設計し、製作が出来るようになりたい。

・母に楽をさせたい。奨学金をもらえてアルバイトを辞めることができた。

・感動する舞台は、役者だけではなく裏方で支えている人達がいてこそなんだと気づいた。舞台やライブの音響スタッフになりたい。

・奨学金で英語の教材を購入した。シャドーイングのトレーニングをしている。

・動物看護師になって飼い主と動物の心に寄りそう仕事がしたい。

・水泳部で活動している。タイムもすこしずつ上がってきた。

・家庭の事情により、幼い頃から児童養護施設で育ち、支援を受ける側として福祉の大切さに気づいた。社会福祉士をめざしている。

・奨学金で英語の教材を購入した。希望していた弓道部に入部できた。



堂々と発表する奨学生

奨学金が奨学生の勉強や部活動などに活用されていることが伺われ、そのおかげもあって充実した高校生活が送れていることをうれしく思いました。そして、発表者全員

が自分の夢を持っており、その夢に向かって進むことの決意が述べられ、深く感銘を受けました。その夢の実現に奨学金が役立っていることも強く実感できました。

◆グループディスカッションでの話し合い

その後は 10 グループに分かれてディスカッションを行いました。発表した奨学生や保護者、ボランティアで参加した高校生もディスカッションに加わり、①発表を受けての感想、②寄付金の集め方、③お金以外でできることなどについて、自由に意見交換を行いました。



グループディスカッションの様子

グループディスカッションでは、主催者・寄付者・奨学生・高校生ボランティア・関係団体役職員など、幅広い人たちがグループに参加して、率直に意見交換を行いました。多くのグループでは、高校生のリアルな声が直接聞けて有意義だったという意見が多く、今の高校生は自分の目標をもっていて立派だという声も複数ありました。今後の取組については、まずはこの状況を多くの人から知ってもらうことが必要であり、SNS や口コミ、マスコミなども利用しながら、広めていくという意見も多くありました。また、この問題は個人や家庭の問題ではなく、国全体や地域の中で考えていくべきとの意見もありました。自分には関係ないではすまされませんね。

アンケートより（一部：抜粋） 奨学生の発表を聞いて感じたことや応援メッセージ

※58名の方からアンケートにご協力いただき、本当に心のこもったメッセージを頂きました。ありがとうございました。紙面の都合上、一部だけ紹介します。

◎発表された方全てが次のステップに向けての想い、考えを持っていることに感動しました。大勢の前で自分の言葉で感謝を伝えることは相当の勇気が必要だったと思います。これからの生活に生きることと思います。(50代)

◎自分の目標をきちんともち、日々それに向かって努力されている様子を知り、うれしく思いました。「支援を受けて生活に変化が生まれ、感謝している。」という言葉に応援してよかったと思った。(60代)

◎奨学生の報告を聞き、私達、大人は日本の将来に希望を持つことが出来ました。みなさんは“未来”そのものです。自分らしくこれからも頑張ってください！(40代)

◎本当に具体的な目的・目標を持って勉学に励んでいることがわかり、すばらしいと思いました。そして、そういった若者が新潟にいることをうれしく思いました。(50代)

◎初めてこのような会に参加いたしました。直接奨学生の生の声を聞くことができ、それぞれしっかりと自身の将来の目標をもち、それに向かって努力している姿に大変感動し、胸うたれました。一見豊かになったように見える日本、そして一見すると金銭的に苦労している風に見える人達でもきびしい現実があることを実感いたします。将来を担う若者たちにそのような負担、不安を感じることなく皆が平等に学び、夢を実現

して頂きたいです。(50代)

◎奨学金の使い途は、勉強だけではなく部活にも使っている学生が複数いて意外でしたが、見識を深めたり、心を豊かにすることにもつながるため、有効なことなですね。みなさんの発表を聴いてあらためて教えられました。(50代)

◎特に施設で育った方のお話には感動し涙が出ました。社会福祉士はとても立派なお仕事です。是非夢に向かってがんばってください。応援しています。(50代)

◎学ぶ機会、楽しい学生生活を送る機会は平等であるべきであるはずなのに、そうではない現実を改めて知りました。夢をもって頑張っている皆様の少しでもお力になれるならこちらこそ感謝したい思いです。(50代)

◎奨学生のみなさんへ、あなた達の努力と決意に本当に感銘を受けました。奨学生のみなさんが掴んだ教育の機会は、あなた方の個人的な成功だけでなく、社会全体の発展にも寄与します。教育があなた方の可能性を広げ、日本を変える力を持っていることを忘れずにいてください。あなた達の成果と成功の報告を聞くことができ、支援活動の意義を実感する瞬間でした。応援しています！(60代)

◎今回すばらしい志を持った高校生の夢に向かう言葉を聞いて感動するとともに、自分への激励になりました。これからも夢に向かってがんばってほしいと思います。(10代)

ゆきぐに信用組合小野澤理事長インタビュー

職員の仕事は預金集め ではなく募金集め！

2023年9月12日(火)、「ゆきぐに信用組合」への名称変更を1週間後に控えた旧塩沢信組本店で小野澤理事長に奨学金の取り組みについて、インタビューしましたので、内容を掲載します。(聞き手:新潟県奨学金ネットワーク副代表 中川、写真:事務局次長江口)



【本店の理事長室でインタビュー】

◆きっかけは子どもの貧困

中川: 本日は貴信用組合の名称変更を目前に控えた本当にお忙しいなか(9月19日、塩沢信用組合からゆきぐに信用組合に名称変更)、お時間をいただきありがとうございます。奨学金問題の先進的取り組みを行っている、塩沢信組さんに奨学金問題についていろいろお話を伺いたいと思います。まず初めに、奨学

金問題に取り組むことになったきっかけを教えてください。

小野澤: 子どもの貧困が大きな問題となってきたことです。日本は、先進7か国で「子どもの貧困」の比率が最下位となりました。子どもの7人に1人が貧困世帯と言われており、全国民をあげて取り組まなければならない問題だと感じたことです。

中川: 奨学金には給付型・貸与型があり、また対象とする人数やそのための財源をどうするかが大きな問題だと思いますが、この取り組みをするにあたって、どのような準備を行ってきたのでしょうか。

小野澤: 全国の信用組合で独自の奨学金取り組みを行っているところがいくつもあります。やはり、財源をどうするかが大きな問題です。まず、事業を開始するにあたって、奨学金を給付型とするか貸与型とするかを内部で検討しました。返済不要の奨学金を行うには、当組合の事業規模の問題もあり、対象人数はおおよそ年間5~6人程度ではないかと思っていました。給付型奨学金でその程度の募集をやっている信用組合はいくつもあります。でも、始めたのはいいけれど、

実際に財源が不足し、途中で取りやめているところもあります。

◆自己満足で終わってはいけない

小野澤: また、金融機関の社会貢献という名目で、利益の中から財源を確保して奨学金を行っている金融機関もあります。金融機関が持出しして、奨学金事業を実施しているところもあります。でも、これだと、金融機関の自己満足で終わるのではないかと考えました。

中川: 私たちの団体も奨学金事業をやっていますが、「自己満足ではないか」という問題提起は、今、私の心にも刺さりました。もっと、考えなくてはと思いました。

小野澤: 子どもの貧困問題で以前、安倍元首相が全国の大企業に返済不要の奨学金を集めようと呼びかけました。我々も首相肝入りの取組みであったため、手を挙げましたが実際の寄付金は6,000万円程度にとどまった一方で、政府が要した広告宣伝費は3億円もかかり、とても収支が整わず、実行レベルには至らなかったことがありました。

◆魚沼の地から寄付文化を広めたい

小野澤: 古来日本人には、元々助け合いの精神が根付いており、これをもとにした寄付文化があったはずですが。これが今では奉加帳方式、割り当て方式になっています。寄付金を募る場合も、みな、一律、横並びになっており、本当に善意の寄付が行われていないのではないかと。地元の子どもたちは地域の宝であり、そ

の地域の宝のために寄付する人は、必ず地域にいるはずですが。魚沼の地から、見返りを求めない寄付文化を全国に発信したいという思いが、奨学金事業を立ち上げたきっかけです。

中川: 思いは同じです。私も寄付文化がなくなつたと感じており、寄付することが当たり前の社会を作っていきたいと考えています。



【牧之通りにある旧塩沢信組本店】

◆寄付金を募るという旗を掲げる

小野澤: コロナ禍で地元の飲食店を救おうと呼びかけをしたら、地元住民から我々の憩いの場なくなるのは大変困ると共感される方が多くいらっしゃいました。本当は、そのような気持ちを持っている国民も多いと思いますが、自分がどこで、どう行動したらいいか、どう共感したらいいのか、分からない方が多くいます。そのために、まず「寄付金を募る」という旗を掲げる必要があります。

中川: 最初の呼びかけは大切なことですが、寄付まではできないという声や反対意見等はなかったのですか？

小野澤: 当然反対意見もありました。その時に、なぜ反対なのか、何が障害なのか、どのようにやれば多くの人の意見が反映されるのか、そうやって総意を得られるのか常に頭において、考えを巡らしました。

中川: 年間 700 万円を超える寄付金を集めることはすごいことだと思います。第 7 期の寄付金額は約 715 万円ですが、地域内と地域外の内訳を教えてください。

小野澤: 9 割近くが地域で残りの 1 割が地域外です。地域外(県外含む)からの寄付の多くは魚沼出身の方です。

中川: そんなに多くの寄付金をどうやって集めているのですか？

小野澤: 当信組の職員が企業や家庭を回って募金を集めています。一方で、すでに職員のノルマや営業店の預金融資の目標などもやめています。

中川: それはすごい。塩沢信組職員の皆さんの仕事は、預金集めではなくて、募金集めなんですね。

小野澤: 職員はそれだけでなく、コロナ禍で地元の飲食店が苦境になった時には、地元飲食店のオードブルを売っていました。1つ 3,240 円のオードブルを 3,000 個売りました。飲食店からは、大変喜ばれ、オードブルを取り扱う店も 40 店舗から 80 店舗に倍増しました。

小野澤: また。地元企業の就職応援フェアを行っています。いままで、地元の自治体が主催するフェアでは、地元企業が 30 社出展しても応募学生は 10 数名程度でした。しかし、当信組が主催した就職応援フェアは、100 名程度の参加者がありました。これは、職員が各家庭を訪問し、学生さんがいる親御さんに説明して回った成果です。これこそ、信用組合として地に足がついたセールスです。



【気さくなお人柄で話が進みました】

◆職員の意識変革はたいへん

中川: 職員の方の意識はどうですか？私も同じ元金融機関職員として、職員の意識を変えることは大変だと思っています。

小野澤: やはりベテラン職員ほど染みついた意識がなかなかぬぐえません。若い職員は柔軟に対応していきます。私自身が何度も職員研修の講師となって取り組みました。ようやく、世のため人のための仕事として活動することが根付いてきました。

中川: 具体的なことをお聞きします。2022年度奨学金募集要項の選定基準で成績・未来・愛郷・収入の4つの要件がありますが、やはりその中で重要なのは、ふるさとを愛する心、愛郷ですか？

小野澤: 愛郷も大事ですが、採用にあたっては4つの要件とも同じ比重で選定しています。



【鈴木牧之記念館 閉館でした】

◆2023年度は51名を採用

中川: 対象学生は20名程度となっていますが、年度によって違いはありますか？

小野澤: 2016年に第1期募集を始めるときに寄付額は500万円程度であろうと予想し、それを逆算して採用を20名としました。おかげさまで、毎年寄付額が増えてきており、今年は51名を採用しました。

中川: 私どものろうきん財団も高校奨学金事業に取り組んでいますが、本当に厳しい家庭状況に驚いています。でも、本

当にお金がかかるのは大学・専門学校からだと思いますが、今後、大学生に対しても奨学金を行っていくというお考えはありますか。

小野澤: 寄付者の中には、高校生だけではなく大学生も視野に入れた寄付制度を考えてもらいたいとの意見もあります。総代会の中で「基金検討委員会」を作り、そこで今後の奨学金のあり方を議論しています。総代会においても経営問題よりも、そのような話ばかりをしています。

小野澤: 奨学生はボランティアをしてもらうことも条件としています。他にも、新事業として奨学生と保護者が安心して参加できる思い出づくりやイベントをやっていますが、これも基金から拠出しています。奨学金を受けている家庭は、ほぼ全てと言ってもいいくらい生活に困っていますが、低収入の中で一生懸命、それぞれの家庭で収入に応じた生活をしているのが実態です。

小野澤: 余談ですが、多重債務に陥る確率が高いのは、当信組が調査した結果、世帯収入700万円台が一番多く、ここが危険ゾーンです。一度、生活水準が上がった世帯が、収入が下がった時に水準を下げられないのです。

中川: なるほど、それは実感として良くわかります。水準を下げるできないんですね。もうひとつ、お聞きします。奨学金を受けた高校生は、地元に残るのが条件ですか？

小野澤: 学生さんには様々な可能性があるのですが、地元に限らずどこに行ってもいい、どこに羽ばたいてもいいと言っています。でも、もらっている奨学金の背景には多くの寄付者があり、困った時は一人ではない、多くの魚沼の人が支援していることを忘れてはならないとも言っています。

中川: ろうきん財団の高校奨学金の取組みでは申込者の約8割が母子家庭でした。塩沢信組さんの内訳はどうですか？

小野澤: 私どもの奨学金はひとり親家庭が対象なので、50人中9割が母子家庭、1割が父子家庭です。生活が大変な家庭も多いので、困りごとがあれば当信組が相談にのると言うと、皆さんほっとした顔をします。

中川: 奨学生で地元に残る人の割合はどのくらいですか？

小野澤: 卒業生の会があり、高校卒業後就職する方は2割弱で、地域内に30%、地域外が70%くらいです。後は専門学校や大学への進学です。卒業後は県内に40%、県外に45%くらいで、地元就職する方も20%ほどいます。最近は売り手市場で高校生が金の卵として扱われています。

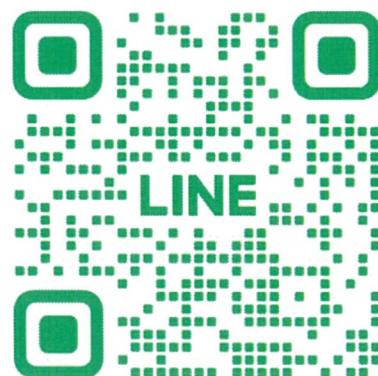
小野澤: 新潟県奨学金ネットワークはいっつ発足したのですか？

中川: 4年ほど前から、準備してきましたが、実際に立ち上げたのは2022年で、今年で2年目になります。立ち上げ前から奨学金に関するシンポジウムを開催したり、特に先進的な活動を行っている北海道の取組を参考にしたいと思い、講演を依頼したりしました。ただ、それぞれの団体にはそれぞれの思いがあり、なかなかネットワークとして広まらないのが現状です。各種情報を提供して、多くの団体と緩やかな繋がりをつくっていきたいと考えています。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。 本日はたいへん、ありがとうございました。

小野澤: こちらこそ、わざわざお出で頂いてありがとうございました。

以 上

ゆきぐに信用組合の公式ラインアカウントです。理事長室にも掲示してあり、熱心に勧誘されました。(中川・江口とも登録済、かなりの頻度で様々な情報が送られてきます)



BOOK 紹介

教育費破産 安田賢治著 祥伝社新書 2016 年 11 月発行

本書は、少し前の発行ですが、あまりにも高い教育費に悲鳴を上げている多くの家庭の実例が紹介されています。それは例えば

◆上の子に続き下の子も私立の理工学部へ。上の子の学費は捻出できたが、下の子には奨学金を借りてもらった。(保護者)

◆奨学金を借りたが、卒業後ブラック企業に就職し耐えきれずやめた。今はバイトしながら返済する日々。大学を出たが借金だけが残った。(大学を卒業した社会人)

◆東大に受かったが、親に仕送りするお金がなく、結局地元の国立大学へ進学した子がいた。(地方の高校の進路指導教師)

◆奨学金を親に横取りされている大学生がいる。(大学職員)

◆娘は私立の中高一貫校から京大に入ったが2000万円ほどかかった。ある意味、お金で買った学歴だ。(保護者)

なんだか読んでみると悲しくなります。最近でこそ、給付型の奨学金が増えてきましたが、今、返済に困っている人たちには何の関係ありません。大学や短大、専門学校の高等教育学校に8割が進学する時代です。でも、勤労者世帯の収入は増えていません。結果、教育ローンや貸与型奨学金を借りて進学することになります。

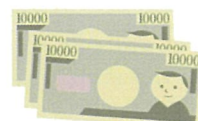
最近、若い友人と話していたら、毎月7万円の返済を43歳までしなければならないという人がいました。また、日本学生支援機構の奨学金返済の3ヶ月以上の延滞者は2023年3月末で13万1千人です。これでは、結婚や

出産、住宅取得などが難しいこともわかります。

私立大学の43%は定員割れだと言いますが、そんな中で、ほぼ全入に近い首都圏の私立大学の教員は「授業を履修している学生は、父親がリストラされて離婚して母親と一緒に暮らしているような、経済的に困窮している人もいます。それなのに大学に入学してくるのは、母親がせめて子どもは大学に進学して、父親のようにリストラされないでほしいとの考えから」とのことが紹介されています。なんだか、これも切ないですね。

また、私立医科大の関係者は「多浪して入学してくる学生は医師の子がほとんどで、最近は歯医者の子どもが増えてきた」とのことです。医師学系は、特定業種の人しか進学できなくなってしまいました。一方で、かつて多くあった大学の夜間部はほとんどなくなってしまいました。それは学生が集まらなくなったからです。

加えて、最近は多くの私立大学で大学独自の給付型奨学金を設けていますが、給付型奨学金の合格者の入学辞退が多く、入学は1割位とも紹介されていました。それは、奨学金がもらえなくとも、第一志望である難関大学を選択する親が多いからだそうです。結局、合格者は貧困家庭じゃないということですね。お金よりも優先することがあるということのようです。必要な人の制度であってほしいですね。



奨学金情報 Topics

■奨学金需給が与える男女の「結婚人生の落差」

慶応大学グループの調査によれば、貸与型奨学金を受給した女性が、結婚のタイミングが遅れ、出産する子どもが少なくなる傾向にあるとの研究がまとめられました。特に短大卒や専門学校卒業生の影響が大きいとのこと。まだ、サンプル数が少ないものの「女性の低賃金、大卒女性と短大卒女性の賃金差、既婚女性の家事育児負担の集中などの影響が推測される」と報告されています。



■犯罪被害者の子ども支援へ「まごころ奨学金」拡大

振り込め詐欺などの被害金をもとに、犯罪被害者の子どもを支援する奨学金制度の活用が広がってきました。「まごころ奨学金」と名付けられたこの制度は、詐欺利用などで金融機関が凍結した口座から返金申請がなかった分が原資となります。本人や保護者が犯罪被害にあった高校生から大学院生までを対象として給付されます。支給額は10年間で7.6億円に達しました。



■困窮家庭の受験料に充当できる奨学金制度

経済的に不利な環境にある子どもの支援に取り組んでいるNPO法人「キッズドア」では、大手外資系の支援により大学の受験料などに充てられる奨学金を設置しました。「貧困の連鎖」を断ち切るには貧困家庭の大学進学率を高めるしかありません。でも、奨学生の半数は1校しか受験できておらず、1回分の受験料しか用意できません。受験料に対する補助や免除への支援要請も多くありました。

本奨学金利用者の進学率も高まりました。若者のチャンスを広げることに繋がります。



【編集後記】3月3日の奨学生成果報告会は様々な反響があり、多くの人に奨学金問題を知ってもらう機会になりました。今、8割を超える子供たちが専門学校や大学等に進学する時代です。でも家計状況から進学をあきらめる子どもたちも多くいます。進学に対して、子供たちには何の責任もありません。社会で支える仕組み、そして市民が支える仕組みが必要です。もっともっと多くの人たちから、関心をもってもらい、活動に参画してもらいたいと考えています。(なかがわ)

第5号 2024年3月25日
新潟県奨学金ネットワーク
事務局 新潟県労福協
〒950-0965
新潟市中央区新光町 6-2
TEL 025 (281) 0890
FAX 025 (281) 0891
発行責任者 中川 亨